
剣齒虎の夢

吉野眞人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣歯虎の夢

【Nコード】

N0954P

【作者名】

吉野真人

【あらすじ】

年老いた剣歯虎が遭遇した脅威のモンスター。

剣歯虎は、自分が住处としている洞穴の中で目を覚ました。剣歯虎は首を重たげに持ち上げ周囲を見渡した。崩れた岩盤が自然に積み重なった洞窟の中には、どこにも変化は無かった。

剣歯虎の透明な金の瞳は青黒い闇を軽々見通した。進化した犬歯……迫り出した曲刀のような長大な剣歯を備えた上顎と、下顎を大きく開け、欠伸をする。喉に溜まった唾液を追い出すために低く唸る。剣歯虎は老化したとはいえ、強靱な筋肉をくすんだ金色の毛皮で包んだその体軀を震わせた。鋭い琥珀色の爪で地面を静かに引っかく。2、3日前に小さな鹿を喰ったので、さして腹は減っていない。

この老齡の剣歯虎はかつては、草原随一の狩獵者だった。小山のような巨軀に、湾曲した長い牙を振りかざすマンモス象や強力な角で恐れられた長毛サイすら餌にした。他の肉食獣はおるか、同族の争いでも敗けたことは無かった。しかし、老いた今、大型の草食獣を喰らうことはできなくなり、縄張り争いでも、若い同族の剣歯虎は無論のこと、数を頼みとし、屍肉を漁る小型の肉食獣にすら、吠えかかられる有り様だった。

剣歯虎がさらに年を重ねて老衰し、倒れることとなったら、彼らは躊躇無く剣歯虎に牙を剥き、骨まで喰い尽くすだろう。

しかし、それでも剣歯虎は満足だった。若い剣歯虎が黄金に輝く身体をひらめかせながら、待ち伏せをしていた草叢から、風を切つて獲物に跳躍する姿を時折目にできれば、自らの一族こそ、草原における捕食者の頂点だということを確かめることができた。そう、誰も剣歯虎を獲物にはできなかった。獲物を狩るのは剣歯虎であり、狩られるのは他の獣だった。

剣歯虎はもう一度眠ろうとして、顎を前足にのせて瞼を閉じた。その一連のやや緩慢な動作から先程まで気にかかっていたことがゆつくりと霧の中から浮かび上がってくる。

昨日、剣歯虎は狩りに出て、なんとか小腹を満たす程度の弱った小さな鹿を狩った。ようやく手に入れることのできた獲物の肉に剣歯を突き立てて、顎を閉じ、首を後方へ引いて大きく切り裂く。剣歯で獲物を細切れにしてから咀嚼する。剣歯虎は、以前ならば、こんな小さな獲物になど見向きもしなかった。しかし、いまは、これらの小さくて弱った獣が老残の身を養う唯一の獲物だった。

夢中で獲物に食らいついていると、剣歯虎の聴覚が風上の方からざわめくような音を捕らえた。いつもおこぼれを目当てに徘徊している斑ハイエナの群らしい。斑ハイエナは、獲物が弱いと見れば、大勢で獲物を取り囲み、強いと見れば場合はおこぼれにあずかるために待つ。現在の老いた剣歯虎を見れば、さすがに獲物にしようとは思わないだろうが、獲物をかすめ取ることくらいは考えるはずだった。彼らと争いになり1、2匹は倒せても、残り全てを相手にするととなると、どう考えても分が悪い。彼らは空腹だと異様なまでの執拗さを発揮する。剣歯虎は食事を中断する必要があるそうだった。しかし、群は剣歯虎の存在に気がついていながら、素通りしていた。斑ハイエナは満腹であるらしい。

喰れた声で鳴き交わし、彼らはなにがしかのことを重要な反芻すべきことであるようにガヤガヤと仲間に伝達しながら去っていった。随分と大きな獲物のおこぼれにあずかったらしい。成獣のマンモスだろうか。この辺りには、マンモス象を狩れるほどの熟練した剣歯虎はいないはずだった。

剣歯虎はまた、まどろみの中に沈んで言った。

夜半。何かの異臭が剣歯虎の嗅覚を刺激した。聴覚も聞き覚えのない奇妙な甲高い鳴き声を捉える。剣歯虎はすぐさま跳ね起きた。瞬時に全ての感覚を外界に開放すると、自分の住処に侵入してきた

ものに備えるため、全神経を張りつめさせる。どうやらこの洞窟を別の獣が奪いにきたらしい。同族の剣歯虎でないことは唸り声で分かる。忌々しく小賢しい狼類か、図体の大きさと腕力を誇る熊類か、歓迎されざる親戚である獰猛な大型猫科獣か。だが、唸り声はどの獣とも違う。

侵入者は耳障りな叫びを上げながら姿を現した。3匹だった。

奇妙な獣だった。さほど、大きくない体を細かな体毛が全身を覆っている。だが、扁平に広がった顔には毛がない。威嚇のためか、歯を剥きだしにしている。さらに、熊のように妙な姿勢で後脚だけで立ち上がり、奇怪な爪を振りかざしていた。猿を喰う気の無かった剣歯虎は前足を踏ん張り大きく吠えた。大抵の獣なら、剣歯虎の姿と咆哮を耳にただだけで一散に逃げ出すはずだった。だが、奇妙な猿は逃げ出さなかった。恐怖に脅えながらも、爪を振るい、あるうことが襲いかかってきた。すぐさま剣歯虎は反撃した。強靱な前足で猿を薙払い転倒させると、その剣歯で猿の右前足を寸断する。猿は絶叫した。もう2匹の猿が左側面に回り込もうとしていたことを素早く察知した剣歯虎は、再び猿に襲いかかる。一匹は運が悪く剣歯虎の前足に踏みつけられた上、剣歯を首筋に打ち込まれ、絶命した。恐れた一匹は右前足を失い、のたうち回っているもう一匹を支えながら逃げ出した。

剣歯虎は猿を追わずに、殺した猿の死体をゆっくりと嗅ぎまわった。ひどく臭く、とても喰う気にはなれなかった。見れば見るほど醜い奇怪な猿だった。

剣歯虎は猿の残していった爪に興味を持ち匂いを嗅いだり、前足で転がしてみたりした。

これは本当に爪なのだろうか。妙に長い。唯の木のようにも見えた。よく見ると爪ではなく先端には鋭い石がはめ込まれている。剣歯虎はゆっくりと記憶野を探る。猿はなぜ戦おうとしたのか？ 偶然でくわしたことは考えられない。確かに、戦おうとしていたのだ。自分に対して。最初からこの洞穴を奪いとるために猿はここにやつ

てきた。もしかしたら……そう、自分を獲物にするつもりだったのかもしれない。

猿のだらしなく開いた口から舌がはみ出ている。だが、その目は見開かれており、何かを見据えていた。瞳孔の開き切った目を剣歯虎はゆつくりとのぞき込む。その時、剣歯虎の脳に未来の記憶が流れ出した。普段、泥の中に眠っているような意識が鮮明になる。

われらは、この醜い猿と大型の草食獣を巡り、争うことになるだろう。この猿は大型の草食獣をことごとく食いつくし、われらは飢える。飢えたわれらは彼らに牙を剥くが、もはや敵わず、猿に滅ぼされる。われらの牙は抜き取られ、猿の爪になり、肉は喰われ、骨は猿のねぐらの一部になる。

すぐに記憶は消えた。だが、剣歯虎はゆつくり頭を振った。記憶が消えても剣歯虎の脳には不愉快なものが残った。それは次第に恐れとなり、不安となり、終いには怒りに変化した。剣歯虎は我知らず駆け出していた。洞窟を飛び出し、波のように草がざわめき立つ草原を走り、漆黒の森を駆け抜け、小川を飛び越えて一散に駈けた。四肢を踏ん張り、丘の頂に立ち咆哮する。吠え声は夜の湿った空気を震動させ、潜んでいた小動物を逃げ散らし、休んでいた鳥達の目を覚まさせた。

剣歯虎がいくら吠えても、その雄叫びは底知れぬ夜闇に溶けていくばかりだった。剣歯虎の咆哮は次第に掠れて小さくなる。それでも剣歯虎はがむしやらに吠えたて、吠えることを止めようとしなかった。吠え狂う老いた剣歯虎を、青ざめた月が静かに見下ろしていた。

（後書き）

ありがちなオチではありません。剣歯虎。憧れの生き物でありました。サーベルタイガーではなく、サーベル・トウース・タイガーが正しいのかと思っていたら、最近では猫科という解釈が一般のようです。サーベル・トウース・キャット、略称サーベルキャット。剣歯猫。猫。にゃんこ。ごろにゃん。しょぼい感じが否めないですが、おっかなかったことには変わりないので、よしとしたところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0954p/>

剣齒虎の夢

2011年2月13日14時40分発行